

山梨インターハイ視察からの考察

報告者: 村下 和之(沼津西高校) 大石 知宏(静岡商業高校)

■目的

インターハイ準々決勝から決勝までを視察し、今後の育成・強化の取り組みについて考える
勝ち進むチームの特徴をつかみ、トレーニングのヒントとする。

■期間 8月6日～8日 3日間

■分析対象: 山梨インターハイ

準々決勝 前橋育英 vs 星陵(2-1) 東福岡 vs 鹿児島実業(4-2)

準決勝 東福岡 vs 青森山田(3-1)

決勝 東福岡 vs 大津(4-1延長)

■報告対象者:

コーチングスクールおよび育成に関わる指導者

■流れおよび全体像:

70分ゲーム。1回戦から3回戦まで3連戦、1日はさんで3連戦というタフな大会。

気温が30℃以上、湿度も50%近くでの環境下でのゲーム。給水タイムあり。

■課題の発見と分析

☆攻撃・・・『シュートの意識』『ボランチの前への仕掛け』

チームの流れがよく、相手ゴールに近くまで侵入してもパスを選択する選手が多かった。シュートする意識、最後の部分は、『自分で打つ。決める。』というメンタルがまだ弱い。また、ボランチの選手は、どの選手もボール奪取力や、効果的なサイドチェンジや幅を生み出すためのサイドバックへのパスをする意識が強い。一方、FW(トップ)にボールを当て、相手センターバックと相手ボランチの隙間に入り込もうとする意識が低い。そのため、なかなか真ん中の崩しが生まれない。もっと、積極的にくさびのパスを入れようとする意識が高い方が良かった。『ボランチの仕掛け』は攻撃に必ず厚みを増すことができる。それをするために、ボランチはテクニックがある選手を配置すべきだと考える。テクニックがあれば、視野の確保が生まれ、サイドの選手も信頼を置いて『トップスピードにのって前へのスペースに走り込めば、必ず見てくれる、出してくれる』という考えが生まれ、攻撃がスピーディーになる。

☆守備・・・『下がってブロックを作って待つてはいるが、守ってはいない』

前線からプレッシングをかけてコンパクトにして守備ブロックをつくり守るチームが多かったが、ブロックを形成した際に、肝心のボールの出所がフリーになることで、崩されていたことがあった。当たり前のことではあるが、ファーストDFの徹底、1対1の粘り強い守備、数的優位を作り挟み込む守備を徹底しなければいけない。また、守備は勝利へのメンタリティが鍵になる。それが、日頃のトレーニングで選手にコーチングではな

く、ティーチング(教え込み)が必要である。

また、ボールを奪い取るテクニックとして、足首を立てたスライディング、相手シュートを防ぐテクニックのスライディングのプレーがあまり見られなかった。最後の手段であるからこそ、最後の細部まで突き詰めたスライディングのトレーニングの必要性を感じた。

☆切り替え・・・『プレスバックを速く』

攻撃から守備の切り替えが早いと感じるチームが少なかった。コンディションの問題も考えられるが、カウンター攻撃を許していた。また不用意にスピードを上げてドリブルを仕掛け、奪われてカウンターを受けてしまうプレーがあった。カウンターを受けてしまうということは、チーム内にスペースができてしまったということ。よって、選手の定位能力の育成(自分の守備ポジション、仲間との適切な距離感)をトレーニングから行うべきと考える。

切り替えは、監督の戦術指導に関わる問題でもある。前から 80 分間、ボールを奪いに行くのか。センターラインから奪いに行くのか。夏場の連戦、敵との相対的な力関係、チーム内のフィジカルの特徴などを考えて、ベンチワークをしないといけない。

☆暑さ対策

30℃を超える環境下でのゲームであったが、ハーフタイムに体を冷やす工夫をしているチームが少なかった。ユニフォームを脱ぐ程度であった。パフォーマンスを上げるためにアイスバスや濡れたバスタオルなどで体を冷やすことが必要であると感じる。(小粥氏の講座でも紹介された)

■トピックス

☆東福岡のサッカー・・・決定機を作るサイドアタッカーの存在するチーム

優勝した東福岡高校は、1-4-3-3で両サイドの高い位置にウイングプレーヤーを置く布陣でゲームを展開した。両サイドがワイドに開き、ボールを受けると縦に仕掛ける意思が強く、どの対戦相手もそこを破られて失点した。また、選手一人ひとりの立ち姿がよく、プレーに安定感をもたらしていた。視察直前に小粥氏のスペシャルサッカー講座を受講していたので、より一層、体幹周囲の筋力の重要性を感じた。圧倒的な攻撃力で前半に得点を奪いゲームを支配することが多い。しかし、守備になった時に、両サイドの攻撃の選手が守備をあまりしないのと、守備のポジションの選手も以前は前線の選手のように、カウンターをうけるともい。プレミアリーグで、J クラブに大敗するゲームがあるところをみるとそこを突かれているのではないかと感じる。

☆勝利するチームの条件

勝利するチームや成功するチームには、強い団結力、選手の特徴をいかした適正なシステム、チーム内の正しい競争、監督と選手の良い相互関係、そして、選手のクオリティーがある。東福岡高校は部員 270 名の大所帯で、その中で選ばれた先発メンバー 11 名、サブメンバー 6 名は、とても高いクオリティーがあった。(途中出場の選手も、先発と遜色はなかった)

東福岡の優勝が決まるロスタイム中、4 審にスパイクの裏、スネアテのチェックをパスし、17 番の選手がセンターラインで、アウトオブプレーになるのを待っていた。しかし、その選手にとったら無情の試合終了の笛。一瞬、膝に手をかけ落ち込んだが、その後、みんなの歓喜の輪へ。

私たちがスタジアムから駐車場へ向かう途中、試合に出場しなかったサブの選手同士がハイタッチで

『優勝したな!良かったな!』と言いながら、帰りのバスへ颯爽と走り過ぎた姿は、強い団結力と心地よい高校サッカーの風を、暑苦しい甲府盆地に吹かしてくれた。

□提言

・サイドアタッカーの重要性

今回、優勝した東福岡高校の勝因は、両サイドの増山朝陽選手・赤城翼選手が1対1で相手に勝てるところにあった。とくに増山選手は、スピード・フィジカル・クロスの精度にもすぐれ、将来性を感じさせる選手であった。最近の静岡県のゲームを見ていると、サイドにボールが入っても縦への突破ではなく、内側へのパスを選択する選手が多い。以前の静岡県では、縦に突破できる選手がゲームで活躍していた。

・クロスの精度も緩急を使い分けたキックが必要

サイドハーフや、オーバーラップしたサイドバックのクロスボールの使い分けは重要なポイントになる。ゆっくりした優しい山なりのクロスは、中の合わせる選手のタイミングが取りやすい。また、相手DFのクリアーの飛距離が出ないので、カウンターを受けにくい。東福岡高校の増山朝陽選手は、その使い分けが素晴らしかった。時に、低い弾道の強いクロス、時にファーサイドへの山なりのクロス、さらにマイナスのミドルシュートを誘導するクロス(パス)の選択力をもっていた。

・監督(指導者)の目指すサッカーの実現力(徹底力)とタレント発掘

『獲得 → 説得 → 納得へ』

東福岡のサッカーは、チームとして、個人としてもやるべきことが、他のベスト8のどのチームよりもはっきりしていた。中でも、強さ高さがあるDF、運動量豊富なMFの底、創造性溢れる才能とテクニックをもつ司令塔、確かなテクニックとそれを活かすスピードと高さ、そして決定力があるセンターFW、1対1では必ず仕掛けて相手DFを抜き去るサイドアタッカーは際立っていた。

監督(指導者)は自分自身の実現したいサッカーを構築するための選手をリクルートし、なおかつ自分の目指すサッカーをするためのトレーニングノウハウを持つ。そして、モチベーターとして、選手に戦う意義、選手の心に火をつける話術(ユーモアも)が勝利に近づく。明らかに、東福岡の選手たちは、以前、雪の国立で旋風を巻き起こした選手たちと同等のレベルがあったように感じた。(1997年の本山・宮原・千代反田・古賀などの時代)

・サッカー王国『静岡』の復活へ(思いを込めて)

山梨方面から4日間富士山を見ても、今イチじっくりこなかった。富士山は富士山であっても。毎日、静岡県から見る富士山は、やはり優雅に見える。『日本一高い山は?』と聞かれれば、誰もが富士山と答える。では、『日本で2番目に高い山は?』と聞かれても…。山梨県にあることは知っていても、なかなか即座に答える人は少ないだろう。『日本でサッカー王国と言われる都道府県は、どこ?』と聞かれても最近の若者は、残念ながら静岡といってくれる人は少なくなってしまっただろう。

あの全国大会で勝つよりも、静岡で勝つことの方が難しいと言われた静岡のサッカーを取り戻さなければいけない。そのために、指導者自身が様々な角度からサッカーを見つめて、考えて、日々研鑽して自分のチームに還元をする。古典的ではあるが、その情熱がまず王国への復活に向けての第1歩のはずだ。山登りをして、頂上にたどり着くためには相当体力的にきつい。しかし、頂上にたどり着いたら、何とも言えない達成感がある。その日を信じて…。繰り返すが、静岡県から、観る富士山は日本一だと感じる。